

9/2

### 山之村地区で初のデイサービスが開始

神岡町の山之村地区で2日、山之村初の介護サービス事業所「山之村デイサービスセンターまごの手」がオープンしました。

デイサービスは、同町殿の介護事業者「ななほし」が市から委託を受け、同町森茂の山之村診療所内で行い、毎週水曜日に同社のスタッフ2人とボランティア1人が訪問し、体操や茶会の場を提供します。また、飛騨市民病院の理学療法士を講師に迎え、利用者ごとのリハビリを助言します。

初日は同地区に住むの高齢者ら5人が訪れ、体操や利用者同士のおしゃべりなどを楽しみました。

この日は「神岡ライオンズクラブ」と「経済クラブ十三日会」の寄付金贈呈式も行われ、両団体が連名で17万円をななほしに寄付しました。



9/5

### 魅力的な公園づくりを目指す

古川町高野の古川スキー場跡地に桜を植樹して整備を進める「高野千本桜夢公園」の現地を散策し、利用推進のアイデアを出し合う意見交換회가5日、同公園で行われました。

意見交換会は、住民らのさまざまな意見を取り入れた魅力的な公園づくりを目指すため、市が企画したもので、市内外から18人が参加しました。

参加者らは、市職員の案内で公園内の桜の木や周辺の森林のほか、整備が進む園内を見学しました。

ワークショップでは、「静かで騒音がない」「広葉樹と桜のコラボが良かった」「トイレが欲しい」などの意見や感想を出し合いました。参加者は「市民の方が訪れる公園になっていくことが楽しみ」と話していました。



9/6

### 飛騨市に3カ所目となる新コースが開設

自然の野山を歩いて治療するドイツの「気候性地形療法」を基本とした健康づくりの運動療法「飛騨市クアオルト健康ウォーキング」の新コース「アルプス展望神秘の森コース」の認定式が6日、神岡町伏方の流葉温泉Mプラザ周辺で行われました。

開設したコースは、同施設を発着とする約3.94kmで、道中で登る高度の合計を指す「累計高度差」は175mあり、全国でも屈指の運動強度となっています。また、高所からは北アルプスの雄大な景色が一望できます。

認定式では、都竹市長が日本クアオルト研究所（名古屋市）の大城孝幸社長から認定証を受け取りました。認定式終了後には、市民ら約30人と一緒に記念ウォーキングを楽しみました。



9/7

### 正しいコロナ対策で、楽しい修学旅行を

飛騨市民病院の医師で感染症の専門的知識を持つ、中林玄一先生が7日、神岡小学校で特別授業を行い、11月に実施予定の修学旅行に出かける児童へ新型コロナウイルスの正しい対策を解説しました。

中林先生は、飛沫のイメージを「ラメ」に例え「見えない飛沫を想像力で色付けして対策しましょう」と解説し、重要3点の「目・鼻・口」を守ることや他の人にうつさないために、マスクの着用や手洗いをきちんとすることなどを児童に呼びかけました。一方で、人との距離が確保できる屋外などでは、マスクを外してもよいことを伝えました。

中林先生は「対策は普段から意識しておくことが大切。みんなで対策を考えて、楽しい修学旅行にしてほしい」と話されました。



9/13 **人** 「特別支援教育の未来」シンポジウムを開催  
**人の特性を生かす教育や社会づくりを考える**

多機能型通所施設「はびりす・ひだ」などを運営しているNPO法人はびりすと市が9月13日、古川町公民館で、「すべての人のGiftを生かす特別支援教育の未来」と題して、シンポジウムを開催しました。

午前には、「地域と専門家で作るまちづくり」をテーマにシンポジウムが行われ、大垣市の「いかわクリニック」の院長である井川典克さんをコーディネーターに迎え、「方眼ノート」を用いた自己啓発のトレーナーとして活躍する青木文子さん、飛騨市民病院小児科部長の中林玄一医師、都竹市長などがパネリストとして参加し、それぞれ思いを語りました。

午後からはワークショップもあり、子どもへの読み書き支援プログラムや子どもの発達をうながす方法を紹介する講座も行われました。



9/15 **和** 吉城高校家庭クラブ委員  
**光園へ手縫い雑巾を贈る**

吉城高校の家庭クラブ委員の生徒らが9月15日、養護老人ホーム「和光園」に同クラブに所属する1年生が夏休みの課題で作った手縫いの雑巾約100枚を寄贈しました。

毎年この時期に生徒が同園の清掃活動を行っていましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため施設への出入りが制限されているため中止となりました。

この日は、3年生の手嶋萌々子委員長と中川泉月副委員長が和光園を訪れ、松井芳嗣園長に雑巾を手渡しました。

2人は「1年生が1枚1枚丁寧に作った。去年のように清掃活動はできないが、役に立ててほしい」と話しました。



9/24 **親** 神岡町子育て支援センターで食育教室  
**親子で楽しくおはぎづくり**

神岡町子育て支援センターで9月24日、食育教室が行われ、市内在住の未就園児の親子17組がおはぎづくりに挑戦しました。

この教室は、乳幼児期から親子で楽しみながら食育を学んでもらうことを目的に、今年初めて行われました。

この日は、市子育て応援課の藤田智子栄養士から「おはぎ」という呼び名の由来や作り方の説明の後、グループに分かれ、きなこあんこのおはぎを作りました。

参加者らは、米をすりこぎでつぶして団子状にした後、上手な手つきであんこをくるんだり、きなこをまぶしていました。試食会では、完成したおはぎを親子でおいしそうにほおぼっていました。



9/25 **受** 宇宙まるごと創生塾飛騨アカデミーが「清流ミナモ賞」を受賞  
**賞の喜びを報告**

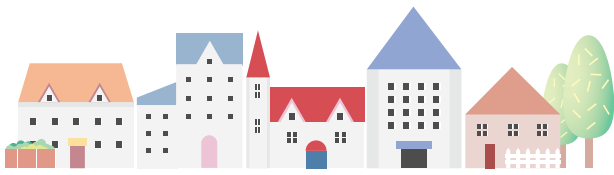
県の「清流ミナモ賞」を受けた神岡町のNPO法人「宇宙まるごと創生塾飛騨アカデミー」の川上佳洋理事長が9月25日、市役所を訪問し都竹市長に受賞を報告しました。

同アカデミーは、市内の自然やスーパーカミオカンデなど神岡町で行われている最先端の宇宙科学研究を活用し、幅広い年代の方々に対して学びの場を提供してきました。また、神岡鉱山坑内の探検ツアー「ジオ・スペース・アドベンチャー」の開催や、ひだ宇宙科学館カミオカラボの運営も担っています。

川上理事長は「県から高い評価をいただいてありがたい。今後もレベルの高い学びの場を企画していきたい」と話されました。







9/28

## 新型コロナ対策 介護・宿泊事業者連携協定締結式 コロナ禍の介護医療体制の充実へ

市内の介護施設で新型コロナウイルス感染者が発生した場合に、施設の運営を継続するため、9月28日、市内の介護、宿泊事業者と市との間で連携協定を締結しました。

この協定は、介護事業者に派遣可能な職員を登録してもらい、1人当たり3万円を給付するほか、実際に派遣した場合には、職員本人に日当3千円、派遣元の事業者には10万円を給付します。宿泊施設に対しては、感染症が発生した入所施設の職員が感染拡大を恐れて帰宅できない場合、部屋を提供すると共に、その宿泊費用を市が全額補助します。

この日は、市役所で連携協定の締結式が行われ、市と4介護事業者、2宿泊事業者の代表が協定書を交わしました。



9/18  
9/30

## 介護事業者が感染防護衣の着脱方法を学ぶ 新型コロナウイルス感染症対策防護衣着脱研修会

介護施設内での新型コロナウイルスの感染を防ぐため、感染防護衣の着脱研修会が、9月18日と30日に開催されました。

この研修は、医療、介護、保健などの事業所で構成される連携グループ「高原郷ケアネット」が介護崩壊を予防するために提案されたもので、飛騨市民病院の看護師2人が講師となり、市内および上宝地区の介護13事業者30人が参加しました。

参加者はフェイスシールド、マスク、ガウン、キャップ、手袋の着脱を体験。着用時はマスクに隙間を作らない、髪はすべてキャップに入れる、脱衣時は防護衣の表面に触れないよう裏返ししながら脱ぐ、手指消毒を繰り返し行いながら脱ぐなど、ポイントを押さえながら熱心に学びました。



## 市民ライターがまちの話題をお届け!! 広報ひだまち特派員レポート

5月から採用している市民ライター「広報ひだまち特派員」が市内のさまざまな話題をお届けします。  
(特派員：水樹 華・岡田 直樹)

9/21

## 飛騨市美術館「親子でつくろう!石こうワークショップ」 かわいらしいミニスタンドづくり

飛騨市美術館主催の「親子でつくろう!石こうワークショップ」が9月21日、古川郷土民芸会館で行われ、保育園児と小学生の親子連れら合わせて11人が参加し、かわいらしいミニスタンドをつくりました。

参加した子どもたちの中には石こうに加える水の量を間違えてドロドロにしまつて作り直したり、土台に針金を固定できずにお母さんの手を借りる子どもも。それでも好きなイルカやアニメキャラクターなどを楽しそうに描いたりしていました。

参加者は「この連休はどこにも連れて行けなかったので、子どもたちの好きな工作が楽しめて良かったです」と話していました。



9/23

## 神岡中文化部生徒から千羽鶴のエール コロナ終息を願って、感謝と元気を届ける

神岡中学校文化部の生徒7人が、地域のためにできる活動の一つとして9月23日、千羽鶴(千羽以上)を飛騨市民病院に届けました。

この千羽鶴は、コロナ禍で地域住民の健康を守っている医療従事者の方々への感謝、地域の方々への力になりたい、そしてコロナの終息を願い、休校明けの6月から8月に部員17人が制作したものです。

この日は、文化部部長の3年生中島彩音さんが岩崎美幸看護部長に千羽鶴を手渡しました。中島さんは「部員それぞれ持ち帰って家族と一緒に折るなどし、千羽以上となった。大きな鶴には部員みんなのサインも書き思いが伝わるように祈りをこめた」と話していました。

